

『有明の別れ』の女院の完全性について

岩* 佐理恵

はじめに

『有明の別れ』は、前半と後半に分けることができる。前半は、男装をした女右大将が自分の跡継ぎを得て、自ら女院となる物語であり、後半は、跡継ぎ左大臣を描く別の物語というようになっていく。

しかし、この後半の左大臣の物語が描かれる必然性は、ほとんどこれまで論じられてきていない。このことに対し、筆者は、物語の前半部分における女院の行為の完全性、正当性を強調するために、彼の見せかけの栄光を描く必要があったのではないかと述べてきた。⁽¹⁾

本稿では、これまで筆者が述べてきた、後半物語において中心の話題となっている左大臣の物語が、物語における世界の表面でしかなく、その後で行われている女院の行為こそが、『有明の別れ』をクライマックスに導く伏線であることを述べ、さらに、物語全体を見渡したとき、一貫して語られている女右大将、つまり女院の神聖性や完全性が見えてくることを論じたい。

〔本文引用は大槻修『有明の別れ―ある男装の姫君の物語―』（創英社、昭和五十四年）に拠る。私に表記を改めたところもある。引用した文の後に、ページ番号を記した。〕

一、女右大将が太政大臣家にもたらしているもの

『有明の別れ』のはじめの部分において、次のような経緯で女右大将は生まれる。

大臣の、おとなびたまふまで、男君むまれたまはで、つぎおはしますまじき世を、かしこき道にもかんがへたてまつりけるを、いみじくおほしなげしあまり、さまざまの御いのりをしたまひしに、この君ばかりがみこもりたまひて、(略) (44)

この女右大将の誕生により、太政大臣家の繁栄を中心とした物語が始まるのであるが、この太政大臣家に対して、太政大臣の弟の関白家が存在している。関白家には、物語の開始から跡継ぎは存在している。

この関白家は、物語開始時には左大将家である。女右大将と、女性に対する振る舞い、楽の才能において、凡人として比較されるのが、左大将の息子で、のちの内大臣となる三位中将である。女右大将が世間から姿を消し、入内後に行われた花の宴において、三位中将は笛を吹く。その際に次のように語られる。

上の御あそびはじまりて、もの興せちなるほどに、左大将の宰相の中将、笙の笛たまはりて、はなはなとふきたてたるをぞ、左の大臣おほしわくかたなくうちしをれたまふを、みるかぎりゆゆしきまでおしのごひたまふ。(略) あまくだる天人もなければ、そこはかたなくて、こともはてぬれば、みなまかだたまふ。(210-212)

ここで三位中将は、亡くなった(ことにされている)女右大将の代わりに笛を吹くが、その演奏について、語り手は奇瑞が起こせず場がしらけたと語っている。

しかし、この三位中将の父関白が、もともと音楽の才能が認められている人物であることを示す箇所がある。⁽²⁾

御あそびはじまりて、御琴どもめす。右の大臣、安名尊といだしたまへる御こゑ、つさせずめでたし。左大将、むかしよりすぐれたまへる御琵琶、つれなき御耳にもおほしいでらるばかりと、つねよりも用意したまへる、似るものなきに、あるじの大将の御笛の音、つねよりことに、雲居をひびかすばかりあはれにかなしきに、(略) (106)

とある。この関白の才能については、作品後半部分においても一度記述されている。上の御あそびはじまりて、関白殿、昔よりなだかき御琵琶かきたたまふにつけて、大将の、箏の笛つかうまつりたまふに、まづ内の大臣おほしいで、しのびてのごひかくしたまふ。(436)

ここで、注目したいのは、関白の一族が、楽器による演奏によって語り手によって評判を語られている一方、女右大将の父、太政大臣は全く楽の才能について触れられていないことである。音楽の才能がないことに加え、他の面においても同じ事が言え

〔キーワード〕語り手／中世王朝物語／奇瑞／天人／結末

*平成一八年度生 国際日本学専攻

そうである。女右大將が出家を望んだときの太政大臣の心情について、次のように語られている。

(略) ことのりをりことに、身にあまる面目におぼしならひては、ひかりかいけち、うせたらん心地ぞしたまふ。(172)

女右大將が賞賛を受けることによって、身に余るほどの面目を保っていたというのである。自分には不相応な面目を保っていたということは、いかに、女右大將が生まれる前と後とで世間の評価が違っていたかということである。これらは、女右大將が生まれる前のこの一家の才能のなさを物語っているのではなからうか。つまり、音楽の才能と、跡継ぎのない家系が、神頼みによって獲得したのが女右大將なのである。

神頼みによって得られた子供は、ただ生まれただけでなく、お告げにより、女の身でありながら、男装を行って跡継ぎとして政治の場に参加し、さらに、本来世間の注目を浴びるはずであったとも考えられる関白家から、自分の跡継ぎとして、男子を太政大臣家に連れてきた。その後、出家を望みながらも、自ら帝の后となることによつて、家としての政治的な立場を、より強固な絶対的なものとした。

巻一においては、笛の才能もまた、奇瑞をおこす家系という、世間からの注目をあつめる特質として、女右大將が新しく太政大臣家に付加したものであるといえよう。

つまり、女右大將という存在が太政大臣家にこれまでになかった栄光をもたらした。太政大臣家に跡継ぎさえいれば満たされるべきはずのものを、女右大將が補充したのではなく、元々なかったものを奇跡的にもたらしたのである。

男装を行い、后となつて、家のために言いなりになつて悲しむ女右大將像が巻一で語られる一方で、太政大臣家そのものは実は神秘性や完全性を持たない一家であり、それゆえに、笛を吹いて奇瑞を起こす女右大將は一族の鍵を握る「神からの使者」³なのであり、自らの子といえども、異質な存在であつたといえよう。

つまり、この女右大將の奇瑞を起こす笛の才能は、太政大臣家由来のものではなく、突然現れた天上のものである。この才能は太政大臣家の繁栄とどのように関わつてくるのであろうか。それについては後の章で述べたい。

二、後半物語における女院の貌貌

巻二以降においても、女院は、巻一に引き続き、左大臣を後見する立場として描かれている。この女院の姿は、巻一と一貫して、太政大臣家の繁栄を望む、太政大臣家の

子としての役割をも担い続ける人物として描かれている。

うちむかひきこえぬ日もなく、おのづから男女のけちめばかりの御つつましさになく、まことまことしき道々のことまで、かたへはのたまはせおしふる御心は、かかる身をおそろしくかたじけなきものに思ひならひたまへる御心には(略)(232)

「などかくゆゆしきことをのみきかせたまふらん。昔の人を思ひかはしきこえし心は、世のつねのかやうのなかにも、なほたくひなくんありし。あさましく心うかりし夢路まよひしのち、ただかくておはするばかりにこそ、思ひをかけたれば、内、春宮の御上にもまさりてなん思ひきこゆる。(略)(286)

左大臣の女性遍歴を描く巻二は、一方ではそれを陰で見守る女院の姿も描いており、女院が天皇の妻となつてからも左大臣、つまり太政大臣家の行く末を担う男子を教育し、自分の子供以上に案じて、見守り続けているかのように続いている。

しかし、その一方で実子である春宮について次のように語られている。
心やすきかたにや、朝夕、御かたはらさらすいでたまひしままに、御琴の音などかきあはせて、かしこくおしへきこえさせたまひければ、故大將の御代にたえにし笛の音を、世の人もこの大臣もさらにつたへたまはぬを、さしこえ、おほえなき御つたへにたがふどころなくかよひたる御いきざしを、ききしるばかりは涙おとすべし。(280)

実の息子である春宮にのみ、笛が伝授されているという最初の記述である。ここでは、「第一子の帝よりは、春宮のほうが、親しみやすいのであるか」という語り手の推測を踏まえた上で、女右大將の実の子とされている左大臣よりも、甥の春宮に女右大將の笛の才能が受け継がれていることに言及している。しかし、太政大臣家の政治家としての繁栄の鍵を握る左大臣の物語においては、笛は女院が男装時代を懐かしむよすがであるというだけの機能しか持たないため、あまり重視されない。³

しかし左大臣の女性遍歴の物語が進み、左大臣に子供が産まれ、太政大臣家の次の跡継ぎが決まった場面で次のように語られる。

さはいへど、左の大臣こそは、よろづ教へおはする御言の葉につけても、なべての人にことなる御才のきはなれど、かたへはかの御心もつつませたまふに、おほしめすばかり、えあきらめさせたまはねば、ただ春宮にのみぞ、とりわきいはけなくより、朝夕よろづをきこえさせたまひしかば、なにごとにつけても、ただひかりかくれたまひし故大將の御かはりには、この宮のみぞすゑの世でらせたまふべき。(406)

さきに、自分の血の繋がっている息子より、左大臣の方を気にかけていると自ら左大

臣に語っていた女院が、実は春宮にさらに深い部分まで政治をも伝授していたということ、ここでは語り手が語っているのである。「とりわけいはけなくより」とあるように、女院の左大臣に対する「内、春宮の御上にもまさりてなん思ひきこゆる」という言葉は、上辺だけのものだったと言う可能性がでてくる。

また、「なにごとにつけても、ただひかりかくれたまひし故大将の御かはりには、この宮のみぞすゑの世でらせたまふべき」と、女右大将の後継者は春宮である、と物語を語る語り手によって宣言されることによって、女右大将の跡継ぎとしての左大臣の物語はすでに破綻し、左大臣が太政大臣家と血の繋がりをもたない子供であること、露呈しているのである。

この記述から、のちに大々的に描かれる奇瑞により、卷二以降の左大臣中心の世界観全てがひっくり返されていく。卷二以降、語り手が語ってきた左大臣の物語は、春宮だけに幼い頃から行われてきた笛や政治の伝授を、覆い隠す表向きの物語にしかすぎなかったのではなからうか。三章で、笛の伝授が全うされる三度目の奇瑞について考えたい。

三、天皇と春宮

笛の伝授から見える女院の思惑を考える上で、実子同士の天皇と春宮という視点から見える女院の権力について言及しておきたい。すでに、西本寮子氏によって「皇統の継承と「光」の継承を描きわけている」と論じられているように、実子たちに対して、愛情や慈しみを超越した接し方をそれぞれに行っており、女院が天皇に対しては冷たい態度をとっていることなど偏りが見られることも指摘されている。

ここで、第二子について考えてみると、「春宮」というのは、皇位継承権を持っているということである。春宮は、物語内においては春宮のままであるが、このことは、物語終末の左大臣への血筋に関する告白が行われた後の展開を予想させる要素をも持っている。

女院の第二子の男子が、親王ではなく、春宮になっていることについて考えてみたい。彼が春宮になったということは、卷一の末尾の方の、

帝おりゐさせたまひぬれば、大臣は関白右大臣にゆづりきこえさせたまひつ。大将は、御子になさまほしくおほせど、言にいでたまはず、内の大臣ぞかけたまふ。中宮も、内、春宮の御母にて、女院と申す。女御、后にたちたまふ。(222~224)

という、主人公女右大将の動向を示す部分で何気なく語られている。

なぜ、第一子である天皇の子供が生まれることを待たずして、第二子は、春宮に据えられていたのであろうか。その理由については物語中では述べられていない。しかし、院が早くに譲位し、天皇、春宮を早々と定めたのは、やはりそこに何らかの事情が含まれているように思われる。

『有明の別れ』について、女院の夫である帝が譲位した卷二以降において、院側が政治の中心となっているということが指摘されている。歴史の上では、白河天皇の譲位の理由について次のような説がある。

(略) 実子の即位により、院として天皇の親権を獲得できた点に他ならない。あとでふれるように、ミウチ政治段階以来、院は皇位を決定する大きな権限を有していた。そして、院政期において、院政を行ない得たのも院などの直系尊属に限定されており、兄や伯父などの傍系尊属が院政を行なうことはなかった。白河の強引な皇子推戴は、結果的に院政への道を確実なものとした。

これを踏まえるのならば、院は天皇の親権を獲得するために譲位をし、皇位を決める権利を持ったということである。第二子を春宮にしたのは、院であり、その間、長く院政を行うことを目的としているようにもとれるが、ならば帝のままでよかつたとも考えられる。また、物語内においては、政治を行つていくという記述が見られるのは、女院の指導を受けた左大臣であり、女院自らも政治に介入しているかのような動きも見られる。

この不自然な人事は、水面下で公に姿を現さない女院が働いていることを、推察させるのであり、卷一の末尾の時点で、第二子を春宮にしているところから、左大臣の卷二以降の女性遍歴、楽の才能のなさ云々にかかわらず、前々から女院の計略が始まっていたことが考えられるのである。

四、奇瑞から浮き出される女院の物語

女院が、陰で動き回っているということが、暗示されているということ述べてきたが、院の四十の賀において、かねてからの笛の伝授の成果が十分に発揮される。

女院と春宮の奇瑞が行われる時、語り手は次のように語る。
けふは、わきてもあやしきまで、ひかりをそへさせたまへり。昔、御櫛の箱にかくされし御笛ぞ、この宮につたへきこえさせたまへる、けふのためにこそは

あらめ。(434-436)

「御櫛の箱」とは、女右大将が笛を入れていたもので、女院が男装を止めてからの人生をかけて行われた笛の伝授が、ついに報われる日が来たことを感動的に述べている。

この女院の奇瑞によつて、天人が降下し、女院が天人の生まれ変わりであるということが発覚する場面は、物語におけるクライマックスである。物語後半部分のクライマックスが、後半部分の視点人物であった左大臣の永久の安泰を約束する出来事ではなく、巻一の主人公、女院自身の大舞台となっている。女院自身の物語について言い換えれば、巻一において一貫して行われてきた、太政大臣家への奉仕についてではなく、実子への笛の伝授の達成が彼女の物語の完結した部分となっているのである。

物語全体を通して語られてきた女院の笛と奇瑞の物語はこのようにして完結しているのである。では、巻二から語られていた、巻一における女院の働きによる左大臣の栄光の物語はどうであろうか。左大臣には子供が生まれているため、当面の跡継ぎ問題に苦しむことがないことは約束されている。その点で太政大臣家の繁栄は約束されているとも言える。しかし、左大臣はこのあと、かねてからの女御への思いを遂げようとして拒まれるなど、何をやってもうまくいかない様子が描かれ、春宮の比較対象へと降格する。

クライマックスの場面における、天人であるという出自の発覚によつて、これまで読者が、女院について不可解に思っていた部分が無理矢理納得させられてしまい、左大臣の存在感は一気に薄くなる。

ここで、物語の流れに逆らつて左大臣中心の物語をたどった場合、春宮の奇瑞を語るることによつて逸らされてしまった話題は何であろうか。

女院の笛の伝授の物語が押し出され、完結することによつて、左大臣の物語の位置づけは、出生の秘密をまだ知らないにもかかわらず、天人の素質を受け継がない「地上人の悲しみ」を描く「左大臣をさらに追いつめるように展開」する物語となっていくが、左大臣の物語を完結させるには、出生の秘密を彼が知る場面を描く必要があるのではなからうか。次章では、左大臣の物語について考えたい。

五、左大臣の物語

かねてからの読者の期待に今更応えるかのように、物語の終末部の描写は、やはり主

人公として、左大臣が描かれ、ここで彼の出生の秘密が侍従によつて告白される。ここで物語はクライマックスを迎えるかのように思われるが、現存部分において、次のように描写され、物語は終わつてしまふ。

「いまはかぎりになりて侍るを、いとゆゆしくかたじけなく思ひたまへれど、つつみながら、せちにきこしめすべきことども侍る。いかでかいまひとたびさぶらひて、黄泉もやすく」ときこえたるを、いといとほしくおぼされて、いみじくしのびやつしておはしたり。まづ、なりにけるさま、うち御覧するより、さまざまはかなき世のはてを、いとあはれにおぼさるるに、内侍もいみじく泣きて、「きこえいではんべるにつけて、ひとかたならずそらおそろしく、すぎさせたまひにし御ためとも」思ひ入る野寺の鐘々きくからにこのくればかりかなしきはなし(480)

これで完結していたと仮定すると、余韻のある結末ではあるが、この告白では、太政大臣家側の事情や、女院の男装など、自分の出生の本当の全貌を知りえていない可能性が高い。また、彼がそれをどのように嘆き、そして克服したり、あるいは絶望して出家したりするかといった彼の結末は描かれずに終わる。「天人の助けによつて栄華を勝ち取った一族の跡継ぎである主人公」なのか「天人に振り回され、惨めな人生を送った主人公」なのかわからないのである。このことから、彼の物語がやはり女院の物語を覆い隠すための道具に過ぎなかつたことが考えられる。

もしも、奇瑞がなかつた場合、左大臣の物語に対して読者が望んでいたのは、妹の中宮同様、左大臣の出生の秘密が告白されることをクライマックスにおくことであろう。しかしそれはそもそも可能だつたであろうか。その告白においては、中宮と同じように実父から行われることは、まず女右大将が左大臣を盗んだという事の経緯を告白自身に知らないのでかなわない。

左大臣の物語を完結させるために、左大臣が巻一で起こつた自分の出生の本当の経緯を知るには、太政大臣家には男子がいなかつたという、物語内でごく一部にしか語られていない真実を知らなくてはならない。女院の隠れ術から男装まで全てを暴露しなければならぬのであり、その場合、左大臣の悲劇性はより増幅され、左大臣の運命を狂わせた張本人である女院の神聖性、完全性は後半物語においては滅殺されてしまふ。左大臣の悲劇はあくまでも、左大臣の血が、女右大将のものでない偽の跡継ぎであるということにとどまらなくてははいけないのである。

左大臣の告白がこのように中断されていることは、完全な暴露を避けるためであり、巻一の女院の、家を守るための行動を蒸し返すことなく、左大臣を、『源氏物語』にお

ける薫のような、実の親の不貞による「不義の子」であるかのように描ききるためであるともいえる。女院の神聖性と完全な暴露は両立しえないのである。そして、作者は女院の神聖性を選んだのである。このことは、物語の最終場面において、全ての真相を知る対の上、太政大臣等がすでに死んでいることから明らかである。⁽¹⁸⁾

この左大臣にとって中途半端な物語の結末は、女右大将が天から遣わされた理由そのものを疑うきっかけとなる。太政大臣家の繁栄は一応物語内において成立し、当面の安泰を約束しているものの、跡継ぎ左大臣の人生を、自らの人生半ばにして、放り出しているかのように思われる。その点において、彼女は物語の初めに読者に向けて提示されていた天命を全うしたとはいえない部分がある。

しかし、むしろ、はじめから太政大臣家の繁栄のためというのは名目に過ぎないのではないだろうか。表面上ではあまいまいではあるが、天皇家に奇瑞を起こすことのできる笛を伝え、やがて政治を行う春宮に全てを託し、人間界を凌駕するということが、女院が地上にもたらされた本当の目的だったのでないだろうか。もちろん、本物語中において、奇瑞を起こす笛を伝授された春宮の治める御世について、この物語は、描いていないので、これまで指摘されてきたように、『夜の寝覚』や『松浦宮物語』などの先行作品の発想を頼りに、あくまでも読者の想像に委ねるのみである。⁽¹⁹⁾

ただ、巻二以降、読者は自分の出生の秘密を知らず欺かれたままの左大臣の人生を観察してきたが、奇瑞の場面において、読者自身もまた、女院という天人に欺かれていたことに気付くべきなのかもしれない。

そう考えた場合、本作品は、物語中にたくさんの伏線を張りながら綿密に練られた物語であるということがいえよう。

六、おわりに

左大臣の物語には、左大臣の栄光を描くことにより、女右大将の、子を盗むという行為の後、ずっと物語の中の世界は正常に動いており、太政大臣家が順調に繁栄している様を描く役割があるといえる。

さらに、物語上の構造として、女院となっても左大臣を慈しみ教育し、太政大臣家の繁栄に従事する女院が語られるその水面下で、太政大臣家の栄光とは別に、天皇家への天人の素質としての笛の継承が行われていたという本当のクライマックスへの物語を隠す役割をもしていたのである。

物語において本当に語られるべきであったのは、天から遣わされた女人が、天皇家に笛を伝えるために、太政大臣家という何の特技もない一家にもぐりこんで、目的を果たす、という物語ではなからうか。しかし、表向きには、前半部分には、一族のために自らの身を犠牲にして世の中を動かそうとする一人の女性が描かれ、後半部分は、自らの出生の秘密も知らない跡継ぎが、その女性に恋焦がれるも、地上人としての不甲斐なさから、他人の奇瑞を眺めて何も得ずに終わるといふかみあわなない物語となっているのである。笛の伝授の経緯を物語の前面に押し出さずに、左大臣の栄華を描き、一方奇瑞によってクライマックスを迎えてしまうことにより、左大臣の物語において重要な、出生の暴露という話題をうやむやにし、右大将が左大臣の運命を狂わせた張本人であることもうやむやにしているのである。そして、女院は表面的には瑕ひとつ残すことなく物語を閉じている。

陰で操っていた女院という完全かつ神聖な存在が、全てを読み進めたときに浮かび上がってくるというこの仕組みは、本当に綿密に描かれているといえる。人の運命や世の中というものを陰で操る神のような超越した存在を、最後まで読者に全貌を明かさず、隠匿したまま描き、物語世界における完全な存在として叙述することに徹しているという点で『有明の別れ』は評価されるのではないかと思われる。

注

- (1) 『有明の別れ』考「巻二以降における左大臣の役割について」(『国文』平成十八年七月)、『有明の別れ』の巻二以降の左大臣「忍び歩きの意味について」(『平安朝文学研究』平成十九年三月)。
 - (2) 松浦あゆみ氏は、「左大将の血筋にまつわる物語展開の一端を読み取る必要がある」と述べている。
 - (3) 『有明の別れ』の笙の笛「女右大将の奇瑞の光と影」(『論究日本文学』平成十年十二月)。
 - (4) 松浦氏は、この場面について、「この時点の両者は、楽継承と家・政道継承という異なる次元で棲み分けをしているともみなせよう。」と述べている。(『有明の別れ』における出生の秘密―作品後半の構造と「男主人公」(『論究日本文学』平成十四年十二月))
- さらに、奇瑞がおこる場面においては、
宮も御族の御心にや、おなじくは人の耳おどろくばかりと、人のきかぬひまひまは、いみじくならはしたてまつりたまへる、音のかぎりふきたてさせたまへるに(略) (436)

というように、女院の伝授が片手間ではなく厳しいものであったことが明らかとなる。

- (5) 西本寮子氏は、女右大将の三つの役割について詳細にまとめ、この記述については、左大臣の「家」、春宮の「光」の継承について述べている。本稿では太政大臣家の繁栄に関わる政治についても、「この宮のみぞ」というように、春宮が重要視されていることを問題視し、論を進めたい。(『在明の別』再考―家の存続と血の継承―) 『中古文学の形成と展開―中古から中世へ』和泉書院、平成七年六月
- (6) 注(5) 西本論文、常盤博士『在明の別』の「天人降下」考(『実践国文学』平成五年三月)、注(3) 松浦論文

- (7) 西本氏『在明の別』の成立期について―男装の意味あいと「女院」の性格―(『国文学攷』昭和六一年九月)

- (8) 元木泰雄『日本の時代史7院政の展開と内乱』(吉川弘文館、平成十四年十二月)

- (9) 左大臣については、「略」一の上になさへものしたまへば、世のなかの政も、関白殿をばさらにもきこえず、ただ御身の上のみうけたまはり、おこなひたまふ。(230)と紹介されている。

- 女院については岡本美奈氏が、女院が病氣をしたという噂に人々が集結するという場面を例に、「女右大将は巻二に入ってもあくまでも人々の中心、政治の中心として存在し、信望を受ける人物として造形されている」と指摘している。(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、平成十四年五月)
- (10) 竹原邦子氏は、隠れ術を使えなくなった女院が、「地上にとりこまれた悲しみで終わらず、それをバネとして地上にかつてない混沌を呼び起こす」ものとして、この奇瑞を女院が悲しみを克服した結果もたらされたものとして位置づけている(『在明の別』の奇瑞再考―物語史の主題へ)、『語文』平成十四年六月。

- (11) 女院の天人としての出自についてはすでに『竹取物語』などとの関連性が指摘されている。(大槻修『第五章』『有明の別れ』の人物造型、第一節女大将、二人二役の早変り)、『中世王朝物語の研究』世界思想社、平成五年八月)、注(6) 常盤論文、辛島正雄『在明の別』覚書―女院の(かぐや姫)的性格について(『中世王朝物語史論』上、笠間書院、平成十三年五月)

- (12) この一件によって左大臣は加階している。

「かかるめづらしきことには、なにごとをかは」とおぼしめして、春宮の宮司、あるかぎり加階たまはる宣旨あり。左の大臣、一位にあらたまふ。(442)

しかし、この後の描写で、太政大臣家のさらなる栄華が改めて描かれることはない。また、この奇瑞の場面を見ているときの太政大臣は、

大殿ぞ、こよなくものわすれしたまへるを、春宮の御笛の音に、さらぬ人々えたへず袖ぬれわたるに、女院は錦の帳にいつかれおはします御心地ずるはしく、ただいま袖うちかへし、たちいでぬべくぞおぼさる。(436)

とあるように、年齢のためか、かなり老衰している。そのためか、笛の才能が、春宮に継承され、太政大臣家の左大臣はその「天人うとさ」が世に露呈されたわけであるが、そのことについての太

政大臣の反応は言及されていない。物語全ての発端である父、太政大臣はこの奇瑞の後、隠棲する。

- (13) 注(5) 西本論文

- (14) 注(3) 松浦論文

このような展開において、太政大臣は、本当に血の繋がった孫である春宮に対して、自らの死に際し政道を教え込もうとするなど、女院同様、春宮に世の政治を任せようとしていることを、小嶋菜温子氏が指摘している。(『有明の別れ』と「源氏物語」―音楽の相伝をめぐって―) 『平安文学論集』平成四年十月)

上のくちをしくおはしますならねど、なほこの御ひかりは、たくひなきにぞ、またさまはかり、御目おどろく。これはいますこしゆくすゑの御まつりごと、いまの御心おきてまでおしへきこえさせたまふ。(468)

左大臣に関しては「ましてかりそめにもまかだたまはず(464)」とそばに常についておかせたことは、述べられているが、やはり春宮を偏重している。

このことは、注(12)において指摘したように、老衰のせいとも考えられるが、太政大臣自らが春宮を特別扱いすることによって、女院が左大臣を顧みなくても、太政大臣に対する奉仕を怠ったという印象を読者に与えない効果をもたらしている。

- (15) 注(6) 常盤論文

- (16) 注(10) 竹原論文

(17) 松浦氏(注(3) 前掲論文)が指摘しているように、左大臣に出生の秘密を告白する人物である侍従は、巻一における「男装を解いた後の女院が正体を明かす際に言及されていない」のであり、男装の秘密は知らない可能性が高い。太政大臣によって、春宮に「めづらしからんこと」のやうに、女院の御宿世をかへすがへすきこえさせたまふ(468)という場面があるが、春宮は女院側の人物であるので、世間に露見させることはない。

(18) 太政大臣の妻である大宮も真相を知っていたと思われるが、物語内でもとあまり言及されない人物である上に、女院の母であり、左大臣に本当の真相を明かすという太政大臣家の将来を揺るがすような行動を起こす存在となる可能性は少ない。

(19) 天皇家(楽を伝授するという構想については、『うつほ物語』『夜の寝覚』などに見られるという指摘が竹原氏(注(10) 前掲論文)によって、すでにされている。

また、「神仏がある使命を持たせ、罪なき天女を下界に遣わせた」という話型の類似)として、『松浦宮物語』との類似が馬場淳子氏によって、指摘されている(『松浦宮物語』の鄧皇后と『有明の別れ』の女右大将―天女としての人物像と摩利支天の面影―、『立教大学日本文学』平成十三年十二月)。

The Completeness of the Queen Mother in “Ariake no wakare”

IWASA Rie

abstract

“Ariake no wakare” is the story written in the late Heian Period. This story can be separated into two parts.

The first half is a story about the general who is a woman (she is the same person in the latter half who became Queen mother), the latter half is a story that centers on the minister who is general’s successor. So far the minister’s story has not been defined.

In this research, it is discussed that this story narrates queen mother’s completeness. The minister’s story only talks about surface part in the story world. At the back of the minister’s activity, the queen mother controls the world of the story as she wanted. From the description about miracles happened by the action behind closed doors, and the succession of music, the mechanism of the story can be considered. Lastly, it is referred that the narrator’s attitude that imperfectly concluded first-ranked minister’s story was to talk about the completeness of the queen mother.

Keywords : narrator, medieval dynastic story, miracle, celestial people, the ending